

特発性心筋症に関する調査研究

研究要旨

本研究班は、1974年に旧厚生省特定疾患調査研究班として、特発性心筋症の疫学・病因・診断・治療を明らかにすべく設立され、その後約40年間継続して本領域での進歩・発展に大きく貢献してきた。本研究は、心筋症の実態を把握し、日本循環器学会、日本心不全学会と連携し診断基準や診療ガイドラインの確立をめざし、研究成果を広く診療へ普及し、医療水準の向上を図ることを目的とした。研究班による全国規模での心筋症のレジストリー、特定疾患登録システムの確立を推進準備し、心筋症をターゲットとした登録観察研究であるサブグループ研究を開始し、登録をすすめた。また、研究成果の社会への還元として、ホームページ公開や市民公開講座を行った

A. 研究目的

特発性心筋症患者の臨床的特徴に関して、バイオマーカー、心筋生検を含む各種検体検査、画像検査などを通じて明らかにすること。

B. 研究方法

特発性拡張型心筋症患者（DCM）の心筋生検標本に対して免疫組織染色を行い、テネイシンCの発現と長期予後の関連を調査した。

（倫理面への配慮）

施設内倫理委員会に研究申請の上、承認された。

C. 研究結果

過去に右室心内膜下心筋生検が施行されたDCM123症例の心筋生検標本を用いて免疫組織染色を行い、テネイシンCの発現（面積比）について検討し、長期予後との関連を調査したところ、テネイシンC発現の面積比が2.3%（ROC解析により決定したカットオフ値）以上の群（22例）では、左室駆出率の改善度が有意に低く、死亡あるいは心移植回避率が、テネイシンC発現面積比2.3%未満の群（101例）と比べ有意に低いことが明らかになった。

D. 考察

テネイシンCの発現は、心筋線維化の程度と相関し、より進行した不可逆的な心筋障害を示唆するものと考えられた。

E. 結論

心筋生検におけるテネイシンCの発現は、拡張型心筋症の不良な予後のマーカーになる可能性が示唆された。

F. 健康危険情報

特になし。

G. 学会発表

1. 論文発表

Anzai T. Inflammatory mechanisms of cardiovascular remodeling. *Circ J* 2018; 82: 629-35.

2. 学会発表（発表誌面巻号・ページ・発行年等も記入）
該当なし。

H. 知的財産権の出願・登録状況（予定も含む）

1. 特許取得

該当なし。

2. 実用新案登録

該当なし。

3. その他